

林 慧君（国語学・国文学）

複合語の語構成論的研究

本論文は、現代日本語における複合動詞および外来語の複合語について、語構成論的観点から考察を加えたものである。

本論は、和語複合動詞の語構成を論じた第Ⅰ部と外来語の複合語および外来語を一部含む混種語について考察を加えた第Ⅱ部からなる。

和語複合動詞について考察した第Ⅰ部は、三章からなり、第一章では、複合動詞を構成する要素動詞の自他の「分布」に注目して考察を加えている。日本語の動詞には、他動詞とそれに対応する自動詞が備わるものと、対応する自動詞を持たない他動詞、対応する他動詞をもたない自動詞がある。自他の対応の備わるものを相対他動詞、相対自動詞、それのないものをそれぞれ絶対他動詞、絶対自動詞と呼ぶことにして、複合動詞内での分布を調べてみると、絶対他動詞は複合動詞の前項動詞になることが多く、相対他動詞は後項に位置することが多いという顕著な偏りが見られるということを指摘する。相対他動詞は、対象への働きかけとともに、対象の変化を含意する。この分布の偏りは、相対他動詞がもつこの意味と関連するとしている。

第二章は、複合動詞の自他とそれを構成する要素動詞の自他との関係を考察したもので、形態的に自他が区別される相対動詞を要素動詞にする複合動詞について検討を加えている。複合動詞の自他の転換は、前項動詞の自他はそのままに後項動詞の取り替えでなされるものが多いが、中には前項動詞の自他転換がなされるものもあること、一つの複合他動詞に二つの複合自動詞形をもつものがあることなどについて、構造的な観点から検討を加えている。

第三章は、「組み立てる」と「組み立て」のように複合動詞とその名詞形が揃っているものがある一方、「崩し書き」「食い逃げ」のように名詞形はあるもののそれに対応する複合動詞がないというのがある。この対応する動詞を持たない複合名詞の語構造上の特色を複合動詞の場合と対比して明らかにしようとした。

第Ⅱ部は、第四章から第九章までの六章を費やして、日本語における外来語の語構成に検討を加えている。日本語の語種は、和語・漢語・外来語がその中心をなすが、近年の傾向として、このうちの外来語の比重の増大が著しい。外来語を含む混種語も平行して増大しているが、この混種語の実態解明は、日本語の将来の造語傾向を探る手がかりにもなると考えて、その分析を多方面から行っている。この分析に際して、外来語を含む混種語に二種あることをまず注意する。外来語の一部分を翻訳した「翻訳混種語」と「和製混種語」の二つで、語構成、語形の長短など種々の側面を比較しながら両者の差異、特色を明らかにしている。第八章で「翻訳混種語」を特に取り上げ、その「訳し方」を分析しているなど、翻訳混種語への注目は本論文の一つの特色をなしている。外来語の一部を漢語訳することで、なじみにくい外来語に一つの類概念を与え、カタカナ語のわかりにくさと全部漢語訳する煩わしさの折衷的な新しい造語パターンが形成されると指摘する。その他、とかく長大になりがちな外来語を縮約して日本語に取り込みやすくする略語の研究など、膨大な資料を収集整理して、数々の新しい知見を提示している。

よって、本調査委員会は、本論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに相応しいと認めるものである。